

回	日付	出演	写真	生没年	出身	出囃子	演目1 収録日 時間	演目2 収録日 時間
1	9月17日(土)	志の輔 (立川)		1954年 2月15日 ↓ 現役	富山	梅は咲い たか	みどりの窓口 2011年2月24日 30分06秒	ねずみ 2010年4月30日 40分33秒
2	9月24日(土)	小三治 (柳家)		1939年 12月17日 ↓ 現役	東京	二上り 鞆鼓 (にあがり かつこ)	厩火事(うまやかじ) 1996年8月27日 34分40秒	死神 1998年3月18日 42分43秒
3	10月8日(土)	文楽 (桂) 先代		1892年 11月3日 ↓ 1971年12月12日	青森	野崎	鰻の幫間(たいこ) 1971年7月23日 22分00秒	景清(かげきよ) 1971年3月30日 24分47秒
4	10月15日(土)	圓生 (三遊亭)		1900年 9月3日 ↓ 1979年9月3日	大阪	正札付	百川(ももかわ) 1978年4月25日 32分53秒	鼠穴(ねずみあな) 1972年11月28日 43分57秒
5	11月26日(土)	志ん朝 (古今亭)		1938年 3月10日 ↓ 2001年10月1日	東京	老松	百年目 1994年3月29日 54分40秒	なし

収録会場:国立劇場 小劇場 (東京・三宅坂)

出典:志の輔:BS-TBSの放送をDVD録画。その他:落語研究会DVD BOX

① TBS 落語研究会



目柳家小さん(1857—1930)と円左の6人であった。第1回は1905年(明治38)3月21日に日本橋の常盤木倶楽部(ときわぎくらぶ)で開催した。**この落語研究会の成功が伝統話芸としての落語を復活させ、これを中心にして幾多の名人が輩出し、東京落語界は明治末期から大正にかけて黄金時代を迎えた。**この研究会は23年(大正12)まで続き、第一次落語研究会とよぶ。第二次は28年(昭和3)3月～44年3月、第三次は46年(昭和21)2月から始めたがすぐ中止。第四次は48年10月～58年4月、**第五次は68年3月に発足していまも続けている。**(小学館 スーパー・ニッポニカ2001)

② NHK 日本のお話芸

Eテレ:
毎週金曜 午後9時30分～9時59分
毎週月曜 午後3時～3時29分(再)総合 :
毎週土曜 午前4時30分～4時59分(再)
BSプレミアム:
(セレクション)毎週水曜 午後4時～5時

③ テレビ朝日 落語者

毎週金曜 深夜26時50分

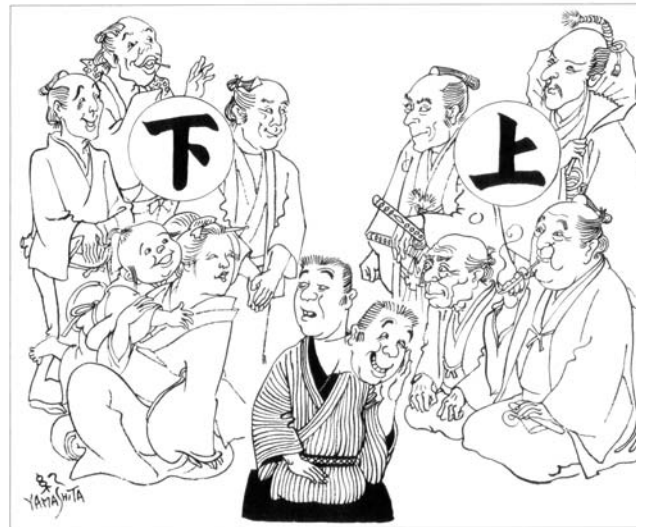
④ 夏目漱石「三四郎」

小さんは**天才**である。あんな**芸術家**は滅多に出るものじゃない。何時でも聞けると思うから安っぽい感じがして、甚だ気の毒だ。**実は彼と時を同じゅうして生きている我々は大変な合わせである。**今から少し前に生れても小さんは聞けない。少し後れても同様だ。——円遊も旨うまい。然し小さんとは趣が違っている。円遊の扮(ふん)した太鼓持は、太鼓持になった円遊だから面白いので、小さんの遣(やる)太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だから面白い。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物がまるで消滅してしまう。小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したって、人物は活潑(はつ)地(ち)に躍動するばかりだ。そこがえらい。

⑤ 落語研究会

明治後期から昭和へ■円朝、燕枝、4代目麗々亭柳橋(1860—1900)、3代目春風亭柳枝(しゅんぷうていりゅうし)(1852—1900)、4代目三遊亭円生(1846—1904)を相次いで失った明治の東京落語界は、人気者の円遊一派に牛耳(ぎゅうじ)られ、正統派・本格派といわれる道を歩いてきた落語家たちは苦境にたった。そこで奮起した三遊亭円左(えんさ)(1855—1911)が当時の落語・講談速記者の今村次郎に相談し、岡鬼(おに)太郎、森暁紅(ぎょうこう)、石谷華堤(いしがやかてい)らを顧問として**「落語研究会」**を結成した。会員は4代目橘家円喬(えんきょう)(1865—1912)、初代三遊亭円右(えんう)(1860—1924)、2代目三遊亭小円朝(1857—1923)、4代目橘家円蔵(1864—1922)、3代

⑥ 落語鑑賞の第一歩 上下



左の顔:殿様、武士、旦那(だんな)、家主(いえぬし)、亭主
右の顔:女性全般、家来、店員、店子(たなこ)、出入りの者、表から入って来る人(男女とも)

⑦ 清水義範原作「みどりの窓口」

清水義範 パスティーシュ100 4の巻
接客セブンティーズ ちくま文庫
清水 義範著
税込価格: ¥1,155 (本体 : ¥1,100)
出版:筑摩書房
ISBN:978-4-480-42554-6
発行年月:2009. 3
みどりの窓口 P.112～135

⑧ 左甚五郎

生没年不詳。江戸初期の大工、彫物(ほりもの)師。播州(ばんしゅう)明石(あかし)(兵庫県)に生まれる。姓は伊丹(いたみ)、名は利勝(としかつ)。京都で禁裏大工で平次について修業後、江戸に出て徳川家の愛顧を受けたと伝える。京都方広寺の鐘楼、日光東照宮、東京・芝の台徳院廟(びょう)、上野寛永(かんえい)寺の造営などに携わり、建築彫刻に妙技を振るい、名声を得たという。日光東照宮の「眠猫(ねむりねこ)」をはじめ、各地にその作と称するものが伝えられているが、**その高名は講談により広く流布したものである。**彫刻を多用する近世社寺建築を生み出した大工像の典型の1人であるが、実在したか否かはさだかでない。(天田起雄)
以上